

ムダなものか すきでして... ⑥

東京でも触れられる自然の一つ、 ヒキガエルの話

今回は、表紙のイラストにも描いたヒキガエルの話。今頃の時期に、ヒキガエルのオタマジャクシに足が生え手が生え、しっぽがなくなって、小さな小さな1cm未満の黒いカエルになり、エラではなく肺で呼吸するようになるため、水中から陸上にあがります。子ガエルはあまりにも小さいので多くの水分を補給できません。干からびて死んでしまうのを避けるため、雨の多い梅雨の時期に陸上生活を始めるそう。

親カエルたちは生んだ卵がちょうどその梅雨頃にカエルになって上陸できるように、成長する時間を逆算した2月末～3月上旬頃(関東の場合)にわざわざ冬眠をいったん中止して、ふだん暮らす場所から水辺まで、時には数kmも命がけで移動し、ペアを見つけて卵を産みます。

ヒキガエルは雌の何倍も雄が多いので、この時期に池などでは地域中から集まった無数の雄

ヒキガエルたちによる盛大な雌の奪い合いが起き、それは蛙合戦と呼ばれています。ペアになれたカエルも、雌に出会えなかった雄たちも、合戦が終わると再び寢床に移動して暖かくなるまで冬眠を続けます。

僕が昔からカエルが好きだったかというそうではなく、8年程前に息子たちがオタマジャクシを捕まえてきて適当に家で飼い、カエルになった際にあまりの小ささに驚いて餌はどうすれば良いんだろうと調べたのがきっかけ。オタマジャクシは麩や鯉節でも与えていれば勝手に育ちますが、カエルは生きて動く餌しか食べません。

一年目の小さいヒキガエルは食べられるものが限られていて、目視できないダニがいそうな土を与えたり、アブラムシを見つけてきたり、なんとか目視できるくらい小さいダンゴムシの赤ちゃんを探したり、それはもう大変です。主に近所のあまり整備されていない小さな公

園で探していたのですが、夏場は暑いし蚊に刺されるし道行く人には怪訝な目で見られるし、人にはお勧めできません。

そういう時間の積み重ねがカエルたちへの愛情を生むのだ、ミクロな視点で公園を見られるようになった、等々自分のモチベーションを上げるために餌探し活動の利点を考えようとしたのですが、やはりかかる手間と時間を考えるとムダすぎる。ムダなことが好きだと言っても限度があります。わかっていながらも、これまで千ピヒキガエルを3回ほど飼いました。餌取りの甲斐なく死なせてしまうこともありつつ、そのうちの二匹がいま、3年目の初夏を迎えています。

今では体長は7cm程。二匹はなんと、二年前に卵塊をいただくことがあって卵から育てました。卵塊の中の黒い粒が少しずつオタマジャクシのような形になって、ある日ピクリと動いた感動は忘れられません。1年も育つと大きなダンゴムシやミズや蝶の幼虫などわりとなんでも食べてくれるし、管理しやすい市販のミールワームも併用するなどして、飼育が楽になりました。

ヒキガエルは一回の産卵で、数千個の卵を産むそう。しかし、成長の過程で多くが他の生き物に捕食され、大人の手のひらサイズにまで育つのはそのうちの数匹程度だとか。十数年生きる者もいるそうで、あなたが遭遇した立派なカエルは十年選手かもしれません。そう考えると、大きなのに出くわしても「お前頑張ってるんだな」と

温かい気持ちで見送れるのではないのでしょうか。

踏まれたり叩かれたり噛まれたり絶体絶命のピンチになると耳の後ろから毒を出します、子どもたちには絶対にいじめないように教えましょう。優しく触るくらいなら毒は出しません。

他の多くのカエルと違い、ヒキガエルは産卵以外で水辺を必要としないので、田んぼがない都会の公園や住宅の庭にもまだまだ生息していて、身近に観察できる生き物の一つです。ぎょっとする見た目やサイズではあるけど、都会に無理やり清流を作って人間が徹底管理して網で囲ってホタルを育てて夏の一瞬だけ「生き物観察会」を催すよりも、四季を通してヒキガエルの観察をして彼らへの理解を深めるほうがよほどふだんの生活に繋がって良いと思うけどなあ。

井上ヤスミチ <http://yasmichi.com>



上陸する頃のヒキガエルは
本当に小さくて、
体長7ミリ〜1センチほど